

研修報告書No.14

所 属：東京大学医学部附属病院

氏 名：2年目研修医 庄司 昂

研修先：田野病院、はまうづ医院、和田医院、
芸西オルソクリニック、馬路診療所

「汽車」に乗りトンネルを抜けると、見渡す限りの青い海。振り向けば、雄大に広がる山々。この先には何が待っているのだろうか。膨らむ期待と少々の不安。高知にきて初めて味わったのは、そんな不思議な感覚だったことを思い出します。

私が高知県田野病院で研修させて頂いたのは2018年1月。入局する科が決まり、引っ越しやら研修のレポートやらでせわしない年末を過ごし、なんとか一息ついたそのすぐ後でした。事前に高知医療再生機構の担当者様から丁寧な案内をして頂いていたため、流れるように現地へと移動。最寄り駅であるごめん・なはり線の田野駅にたどり着くと、ホームには病院の職員さんが。宿舎まで案内していただき、荷物を置いて病院へ移動、あれよあれよという間に研修が始まります。

案内された病院は思ったよりも随分と大きく、快適な場所でした。特にリハビリテーションセンターは光の差し込む広々とした空間。スタッフの方も活気があります。病床数も84床と比較的多く、100%を越える稼働率で回り続けています。

「へき地っていうからには寂れたところなんじゃないか」。来る前までそんなことを考えていた自分を恥じながら話を聞くと、田野病院より東にはもう入院できる病院がないとのことでした。高知県東部の医療における最前線、そこで戦い抜くには相応にパワフルでなければなりません。私が送り込まれたのはそんなところだったのです。

車に乗り込み、シートベルトを締める。往診が始まります。時間は限られている中、車で30分以上かかる場所も含めて回らなければなりません。複数の目的地、それぞれでかかる時間を考慮しながらルートを決めていきます。行く先々では、お変わりのない方もいれば、どんどん病状が悪化している方もいます。それぞれの場所で本人・ご家族とお話しし、適切な処方・処置を行い、場合によっては入院も検討する。東京では全く経験したことのない世界が広がっていました。

往診の他にも、訪問リハビリや訪問介護、デイサービスといった地域に密着した医療にたっぷり関わらせて頂きました。玄関の段差や家の前の急こう配、舗装されていない岩だらけの道。そんなバリアの嵐をかいくぐって支援の手が届きます。想像よりもずっと「いごっそう」な地域医療の姿がそこにはありました。

一方で、差し迫る問題もあります。入院は休止しながらも外来は続けていた室戸病院が1月末で完全に閉院へ。原因は看護師不足。では、行き場を失った患者さん達の受け皿はど

こにあるのでしょうか。いかにパワフルな田野病院といえど、受け入れられる人数には限界があります。

最大限の努力はしているが、最大限ですら足りないことがある。地域医療の最大の問題をそこに見つけました。これから先高知県東部の医療は、人々は、どうなっていくのだろうか。その末を見ることなく、1月26日で私の地域研修は終わりを告げました。

帰りの車窓からみるのは、変わらず青い海と雄々しい山々。行きと違って私の中に渦巻くのは、人の温かみ、力強さ、そしてそれすらも押しつぶしてしまうような抗いようのない何か。もやもやとした、それでいて極めて大切なもの。この感覚を枯らさず大事に育てていこう。今はそう考えています。

さて、話が変わりますが、田野はとても良いところです。宿舎の設備は整っており、すぐ隣にコンビニ、横断歩道を渡った先にはスーパーがあり、生活には困りません。地域の方々も優しく、食事など色んなところに連れて行ってくれます。交通の便もそこまでは悪くなく、高知市内へは1時間ちょっとで出られます。何より、地域医療を学ぶ上での研修プログラムが極めて丁寧にスケジュールされています。地域医療、どこに行くのか迷ったらぜひ田野を選んでみてください。

短い間ですが、ありがとうございました。